

仕事に対する態度

一、高慢と無智から出でよ

「私はこんな仕事をしようなんて一度だって考えていなかったのです。」

この言葉が看護婦から出る。事務員、女工、交換手、農村の娘、時には女教員の方からすらこの声を聞きます。私にはこの仕事は低すぎるというのです。わたしはこんなつまらぬ夫の妻になるはずではなかった。こんな家庭であたら一生を反古のように朽ちはてようとは思わなかったというのです。家庭が貧しいのでこんな職業婦人にならねばならなかった。世が世なら、時が時なら、こんな仕事に恥をしのばねばならぬ身の上ではないと言うのです。

しかしそこには、高慢と無智とが暗い世界をつくっているにすぎません。売春婦など一二の例外をのぞいて、いったい職業に高下があるでしょうか。断じて職業に尊卑も高下もありません。そう考えたのは昔のことなのです。社会は複雑な有機体であつて、全ての部分が完全にうごいてのみ社会の活動は続けられてゆきます。もし職業に高下があるように考える思想が残っているなら、私どもの力でその考えを消滅せしめなければなりません。もつと程度の高い仕事なら精も出せるし、明るい気特にもなれるという人があるならば、高慢であります。複雑な、もつと頭のはたらきのいる仕事があなたに出来得るとしても、それだから今の仕事に精が出せなかったり、馬鹿らしいというのは、高慢であります。高慢な人は、時にはつまらないなあと特に自分を卑下します。

お嫁入りしたにしても、空漠な空想や自負心がたたつて、長い病の姑の看病をしつつ、こんなことをして若い日を送る気ではなかったと、女学校時代の気分がちよこちよこ出るようでしたら、家庭が平和であつたり、おちつけるはずはないのです。もし理想を言うならば、小学校卒業だけした者よりも、高等女学校を出た方が如何なる場合にも秀れているはずです。金があつたり、家柄が古かつたり、学歴があつたりすれば、肉体的労働は一生しなくてもいい身分であり得る特権でも与えられたと思うのは、日本に於ける大きな考え違いであります。仕事に対する正しい理解といたずらな高慢心を棄てて立てば、もつとしっかりした生き方が生れて来るはずです。そうした生き方がのみこめないならば、どんな世界も、人間界である以上、あなたには永遠に明るい天地はありません。

二、多忙に対する態度

「わたしはあまりに多忙です。一日だって遊ぶ日なんかありません。これでは体だつてたまりません」

為すべきことが与えられて、それを為し得るといふことは、私から見れば幸福の一種であらねばなりません。

もし病身でしたらあなたに仕事を強いる者はありません。仕事を与えられるといふことは、なさねばならぬ使命があるのです。多忙であることは為すべき仕事のないよりは、ずつとまじであります。自分の娘を嫁にやる時、仕事の少ない所を選ぶ親があ

るとするならば、それは我が子の活々とした一生を封じてしまう愚かな親でありませぬ。暇なく回ればこそ谷の水車も凍りませぬ。活々とした人生であつてこそ生甲斐もあります。自覚すれば、働くことは、最上の慰めであり、喜悅であります。

自分の身でこれだけの大多忙が背負いきれるかしらと思われるほどの立場、そこでこそ、弱い態度を出さないで、立ちきり負いきつて行きましよう。それが私自身をつくります。横着を幸福と見る者にとつては多忙は最大不幸かも知れませぬ。けれども、働く事に生甲斐を感じる者にとつては最大の幸福であります。多忙なものには疲弊があります。疲弊は睡眠によつて回復します、怠惰による生命の消耗はついに何ものを以てもとりかえずことは出来ない。温室の花はやがて寒気にしぼむを憶え、しまわれたる鉄は名剣とならず、多忙ならず仕事なき歳月を過すは、床下の草の延びるが如し。多忙を不幸と思う、誤まれるもはななだしいかな。

三、利己主義を捨てよ

「先生、わたしは四年間看護婦を致しました。その間、お金を儲けて妹の学費にしました。そして妹に高等女学校を卒業させました。それなのに妹は結婚してわたしなどは眼中にありませぬ。わたしは今もこうして働いています。わたしはど不幸者ではありません。」

と訴えてくる女がある。

「先生、わたしは小学校の教員をしています。そして月々の俸給が渡ると次から次へと、父の手に渡してしまいます。父は商業の失敗がもとで、山のような負債に苦しんでいます。わたしの渡す俸給くらいは『大海に醤油』のような気がします。渡しても渡しても駄目なのです。わたしは働いても働き甲斐ありません。」

こんな苦しさを訴える人たちがかなり多いようです。私はこの心事はかなり強く理解出来ます。

私は現に七人の弟妹の兄であり、老いた父母を持つて過去十数年間私が中心で生きて来たことを思い至る時、こうした苦衷は、はつきりとのみこめます。私も、かつて俸給の半分乃至三割を父に仕送りました。弟や妹の学資も出して来ました。ですから、こうした苦しみに対しては可なり深い悩みを通つて来ました。

私はこれに対してある実話を語つてゆきましよう。

ある所に先祖代々その地方の金満家として幾代も続いた一家がありました。ところが最近そのうちの若主人が、持つて生まれた才能にまかせて、ブローカーをはじめました。あの山を甲から買つて乙に売り、この土地を買つて、値が出た時に他に売つて、はじめの程は儲けましたが、つい失敗をはじめて、それをとりかえそうとしては失敗、失敗しては、又あせり、ついにたいへんな借金に苦しむ身になりました。借財の苦しみはやがて自暴が手伝つて、酒と女とにその一切を忘れようとなります。一家の平和と幸福は全く失われて、火の出るような苦しさが毎日続きます。両親は水のように流れてゆく山や田地を見て、怒りと涙の日を続けます。正直であつた心は失なわれて今はただ金を得ること以外には眼中になく、如何なる荒々しきにも堪えてゆくようになりましました。

そうした数年間の荒波のただ中に一人の女性が美しくも輝かしく生き切りました。それは若主人の妻であります。三百六十五日、一日として真の笑いのない中に立つて病む^{しゅうと}舅をいたわり、義弟妹の面倒を見、姑を助け、小さい時から労働したことのない、か弱い柳のような体をはげまして、山に行きます、畑にも出ます。男のつけるような身仕度をして、糞尿の始末をするのでした。衣裳は次ぎから次から夫がもって出ます。苦しい家の家計を養蚕によつてたすけます。夫は愛のかわりに、世間からの鬱憤の全部を冷たい鞭として渡します。

一夜をまんじりともせず、泣き明かすことも幾夜か続きます。彼女の必死の活動もついに、大厦の傾くには何らの力にもなりません。あわれ一家はついに宅地までも人手に渡してしまつて、離散の憂目を見るようになり、彼女はついにこの一家から離れてゆくより外ない身となりました。彼女は敗れてしまつたのです。しかし果して彼女は敗れたのでしょうか。彼女の背後には何時のはどにか見えぬ光がさしていました。彼女がついにその地を去る日、村の人たちは、「ああ、生きたお手本がこの地を去る。」とて皆泣いたのであります。

彼女は彼女が信ずる方から「忍」の一字を与えられました。忍ぶとは、我が情を徒らにおさえて消極的に生きてゆくことではなくて、人間本然の相にかえつて大積極の生き方をするのであります。彼女は不幸の人を見れば「忍びましよう、忍びましよう。」と教えます。貧しくなるにつれて物の尊さが知らされます。一度の食事、一椀の野菜、これも与えられたものとして頂きます。

「わたしなどいくら働いても駄目です。」その声の中にはあまりに根強い利己心が動いてはいまいか、与えましよう、捧げましよう。与えることが私の尊い一生を實現してゆくのであるという所まで、自覚をはり下げましよう。堂々たる男子でありながら、三十近くなるまで親のすねかじりをして生きている者もあります。私も二十歳の年から親の手助けをいたしました。

学校教育も受けられないで、あたら若い日を過したことを昔はあなたの如く悲しみました。しかし、責任を負うて苦しんで行く事が、或は真に人間を作るかも知れませぬ。それは、大きな課題として貴女のみ手に残ります。

四、健康な考え方

第四は、もつと健康なものの考え方をすることです。「わたしはこの仕事は嫌いです。」とて世の中には仕事を變えて走る人があります。もちろん、体質や趣味によつて好き嫌いはあります。しかし女の虚栄心が手伝わたり、骨折りを厭う心から、華な仕事や楽な仕事に走つて行けば、ついに生きる天地はなくなりません。他人の華は美しいと言います。自分の仕事ならば、苦しい所、いやな所だけが見えて来て、他人の仕事はいいところだけ見えてきます。この矛盾を知らないから、他の仕事に変わりたくなるのです。たとえ変わらないうところに、浮腰でいたのでは十年たつてもその場しのぎです。ひきずられて、他律他動的に年を送つたのでは、進歩も向上もありませぬ。

職業や家業は虚栄の材料ではありません。虚栄の強い人は一生浮ばれません。御主人が何か深いことを考えている傍に来て、「ね貴方、浴衣を一枚買って下さいね。昨年だつて一枚も買っては下さらなかつたじゃありませんか。」と言つたのでは、主人から叱られたり、愛の隔りが出来たりするのが当然です。今着ているものがある間、衣裳の事など一度だつて言はないですむ位には、充実したあなたにならねばだめです。虚栄がふかくなるほど、その世界は嫌になります。

骨折りを厭うことも人間として大きな欠点です。汗びつしよりになりきる所にだけ、地の底からわくような堅実なよろこびがあります。夫の職業を侮辱してはなりません。

育児や、台所働きや、看護やに今日を費していることを馬鹿らしく思つて、心の中では都合の華かさを想像したり、自由な娘時代を追憶したりして、夢や幻のような世界を空想しているようでは、あなたの周囲はそのままが無価値に見え、無意味に見えて暗い現実になつてしまいます。真の自己実現は決して霞や虹の中にはありません。今いる世界にあなたの人格と個性とを美しく実現なさいませ。

五、女性美の保持

第五は女性としての心得であります。

女性は女性なるが故に尊いのであります。女性には、男性の真似は出来ても男性になりきることは出来ませぬ。否、女性が女性らしくなくなつた時は、自分自身の破壊であります。

男性の中で立働いたり、労働をつゞけたりしたために、優雅であるべき女性が破壊されて冷たい中性のようになつた時、あなたの一生は正しい方向をとつてはいませぬ。自尊心と自惚とはちがいます。よく教育者などであつた方が家庭に入った時、妻として母として全然失敗してしまふ方があります。それは一つには女性美のあらゆる点が硬化したり、高慢になつたりしたためであります。女性は永遠に女性であらわばなりません。仕事の上にも職業の上にも女性美が発揮されて行く時、男子の及ばない世界があります。私は女性がもつと開放されて、自由な天地に大胆にはつきり生きていいと思います。決して寵の鳥式な古い世界に女子を封じ込めておけとは考えません。あらゆる天地に手をのぼして女子の世界を建設せねばなりません。けれども、女性が男性になろうとしたり、女性それ自身を失つて男子に勝とうとしたりすればきつと行詰らねばなりません。男性は男性であり女性は女性であるまゝに、いよいよその個性を発揮せねばなりません。

而して女性の真の美は、その教養、その人格より外に成就してはくれません。